

研究経過報告（1991年10月～1992年9月）

杉村伸一郎

1. 空間認知の発達

空間定位の能力は、移動する生物にとって、なくてはならないものである。人間もその例外でない。空間定位は、自己の定位と対象の定位とに区別することができる。自己の定位では、自分が今どこにいるかわからない状態が問題になり、対象の定位では、対象が今どこにあるかわからない状態が問題になる。

後者の問題を発達的に検討したものとして、対象の永続性に関連した課題がある。一般的な手続きとしては、テーブル上の数ヶ所の場所のいずれか1つに対象を隠し、テーブルを回転させた後に対象の場所を尋ねるのであるが、私が疑問を持ったのは、同様な手続きを用いた課題でも、できるようになる年齢の幅が1歳前後から4、5歳とかなり大きいことであった。

この原因として、課題は同じでも年齢により測っているものが異なる、覆い方の要因でできる年齢が前後する、という2点を考え、まず後者の方から検討してきた。これまで覆い方の要因として、カバーにつけた色の手がかり、平面的か立体的かというカバーの形、テーブルを1つのカバーで覆うか隠す場所をそれぞれ別のカバーで覆うかといったカバーの数を検討してきたが、3、4歳児においては、いずれの要因も対象の定位を促進しなかった。

そこで、覆い方以外の要因の検討に移ろうと考えたが、最近、発達検査として標準化されている新版K式発達検査法の中の隠しコップ課題では、3歳までにはほぼ全員が3試行中2試行正答していることを知り、カバーとしてK式のコップを用い、覆い方、カバーの形、色の手がかりの要因が対象の移動の理解にどのような影響を及ぼすかを再度検討することにした。そしてこの結果を、第34

回日本教育心理学会で、「幼児における対象の移動の理解—カバーの効果の検討(2)」として報告した。

課題による年齢の違いとともに、実験を行う中で疑問を持ったのは、テーブルを一度に180度回転させると、子どもは回転を見ていたにもかかわらず回転前と同じ場所を指すが、テーブルが回転している間は、子どもは対象をどのように定位しているのか、ということであった。そこで、テーブルの回転に応じて対象を定位する能力を調べるために、テーブルを45度ずつ回転し、そのつど子どもに対象の位置を尋ねた。この結果については、第3回日本発達心理学会での、「乳児・幼児における空間認知の発達」というラウンドテーブルの中で話題提供者として発表した。

2. その他

以下の2点を分担執筆した。いずれも1993年3月に刊行される予定である。

空間認知の発達と社会化 原岡一馬(編)「人間の社会的形成と変容」ナカニシヤ出版

学習観 宮川充司・坂西友秀・大野木裕明(編)「児童・生徒の発達と学習」ナカニシヤ出版

また、以下のものが刊行された。

「能力と学力」はどう違うのか 学校運営研究 明治図書 1992, No.398, 10-11.

大野木裕明と共著 現職教員は教育評価方法の専門用語をどの程度知っているか 福井大学教育学部紀要第IV部(教育科学), 1992, 43, 81-107.

大野木裕明と共著 教育・学習評価からみた学業試験成績の認知に関する調査的研究 福井大学教育学部紀要第IV部(教育科学), 1992, 44, 103-110.